

令和5年度 新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会 議事録要旨

日時 令和6年1月12日（金）午後2時から4時

会場 新潟市美術館 2階 講堂

出席者

(委員)	副会長	佐藤 靖子	新潟市立内野中学校校長
		捧 実穂	雪梁舎美術館理事長
		鈴木 晃	新潟市美術協会参事
		田中 咲子	新潟大学人文学部・教育学部教授
		馬場 省吾	長岡造形大学学長
		三保 恵美子	茶道表千家教授
		白須 苗子	公募委員
		山浦 健夫	公募委員

(事務局)	前山 裕司	新潟市美術館特任館長
	川瀬 正勝	同 館長
	高橋 努	同 副館長
	荒井 直美	同 学芸係長（主幹）
	児矢野あゆみ	同 学芸員
	松沢 寿重	新潟市新津美術館館長
	栢森 文夫	同 主幹
	長島 彩音	同 学芸員

次第

- 1 開会挨拶
新潟市美術館館長 川瀬 正勝
新潟市美術館特任館長 前山 裕司
- 2 出席者紹介（委員自己紹介）
- 3 議事
 - (1) 新潟市美術館・新津美術館 令和4年度事業報告
(令和5年度事業途中経過報告含む)
 - (2) 新潟市美術館・新津美術館 令和6年度事業計画
 - (3) その他
- 4 閉会挨拶
新津美術館館長 松沢 寿重

1. 開会挨拶

(川瀬館長)

本来高田部長がご挨拶するところであるが、能登半島地震の対応で欠席となった。元日に能登地方を震源とする最大震度7という大地震が発生した。本市においても震度5強という強い揺れと津波警報を受けて、ピーク時には1万4千人以上の方が避難所などに避難した。公共交通の停止、ライフラインの被害、道路の陥没・液状化など市民生活に大きな影響が生じた。幸い新潟市美術館、新津美術館とも目立った被害はなく、1月4日に開館できた。

昨年はコロナウィルス感染症が5類感染症に移行したことで芸術文化活動も本格的に動き出した年だった。本市は文化芸術活動の中核を成す市美術館と新津美術館を有しており、本日はこの2館の運営や事業の実施などについて報告、説明させていただく。委員の皆様から忌憚のないご意見ご助言をいただきたいと考えている。最後に今回欠席されている中山会長、島委員について、ご本人からの申し出で、諸事情により、今回で退任されることになった。中山会長は2008年2月から、また島委員は2018年4月から美術館の運営にご尽力いただいた。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。

(前山特任館長)

年一回の会なので私の肩書も変わった話もしておきたい。非常勤制度の関係で任期を迎えたが、特任館長という肩書を考えていただいた。ただ昨年とやっていることは勤務時間が無くなったことくらいで、何も変わってない。今朝NHKのラジオを聴いていたらやはり地震の話で子どもたちの心の影響の話をしていて、例えば地震ごっこをしている、津波ごっこをしている、という話がでてきていてそれはそんなに心配しなくていいという話をしていたが、美術館はこういうときに心の支えになるのではないかと思っている。東日本大震災の時は埼玉にいたが、福島県から避難してきた方がいて、その方々が美術館に来てものすごく喜んでくれた。美術館はこういうとき心の支えになるんだなと改めて思い直した。

2. 出席者紹介（自己紹介）

出席委員が自己紹介

3. 議事

(佐藤副会長)

中山会長の代理で議事の進行を務めさせていただく。意義ある会議になるよう皆様には運営にご協力いただきたい。

(1) 新潟市美術館・新津美術館 令和4年度事業報告（令和5年度事業経過報告含む）

年報及びパワーポイントの画像に沿って、新潟市美術館の令和4年度の事業報告と参考
に令和5年度事業経過報告について事務局より説明。

続いて、年報及びパワーポイントの画像に沿って、新津美術館の令和4年度の事業報告と
参考に令和5年度事業経過報告について事務局より説明。

(田中委員)

新津美術館のことでお聞きする。当初、所蔵品は持たない、ということで始まったが、
少しずつ増えてきたと以前どこかで耳にしたように思う。今の収蔵方針というのをお聞か
せいただきたい。

(松沢館長)

新津美術館は、合併前は新津市美術館であった。美術館の建つ金津地区出身で日展でも
活躍した笹岡了一という洋画家がいて、その遺族から30年ほど前、旧新津市にまとまっ
た作品寄贈があり、それが開館のきっかけになった。そうした経緯から、新津市美術館は
笹岡了一の作品をいわば特別枠の所蔵品としてスタートしているのだが、財政規模の事情
もあり、新潟市美術館のように積極的に作品を収集していく方針は立てずに、合併まで経
過していた。合併して新潟市の施設となり、新潟市美術館と新津美術館と2館連携して進
めていくようにという動きが本格的にはじまったのが今から十数年前だ。新津美術館はそ
の段階では博物館類似施設だった。博物館法に則った施設になっていなかったのだが、そ
の頃着任した館長が新潟県の美術館を長くお勤めだった方で、きちんと収蔵品を持つ、ポ
リシーをもって集めていく、そしてそれを活用していくというオーソドックスな美術館の
スタイルを確立するべきだという考えがあり、作品を収集するという方針を固め、博物館
相当施設の指定を受けたというふうに私は記憶している。収集方針は大きく2つ柱が設け
られており(年報96ページ)、新潟地域ゆかりの美術、それから現代のマスカルチャー
という、要はジャンルを限定せず間口を広くしておいて、新しく出てくるチャレンジング
なものも含めてという意味で、現代のマスカルチャー。現代の文化を象徴するような素晴
らしい表現があったら収集の対象にしていこうということで、おそらくこれは新津美術館
の企画展で開催する機会の多い絵本の展覧会であったり、マンガ・アニメだったりするこ
とも視野に含めたものだったと理解している。おかげさまで収集品800点超の収蔵品を持
つに至っている。

(田中委員)

今回草間彌生の版画が一点あったということで、コレクションのものは別だと思うが、
市美術館も草間彌生の版画は結構お持ちであると思っていたので、その辺どう分けるのか
という疑問で質問させていただいた。

(松沢館長)

実は、寄贈者が新津美術館の近所にお住まいの方で、強いご意向があった。もちろん公立の美術館で活用してもらいたいが、気持ち的に遠くにはやりたくない、近くの美術館でという申し出をされてきたものですから、それならば、ということで今の形になっている。2つの美術館の所蔵品というのは、本来的には新潟市という大きな枠の中では一体のものと考えている。2つの美術館の今の所蔵名義が未来永劫に続くのかということも含めて、長い目で検討していく必要はあるだろうと考える。

(田中委員)

所蔵品つながりでもう一言。市美術館も、例えば牛腸の写真作品が昨年度収蔵になって、今年度の企画展で展示された。市美術館は所蔵品が多いわけだが、よく私が感じるのは市美術館は所蔵品をうまく活用して企画展を企画しているということだ。コレクション展ではなく、企画展でこうして活用するというのはすごく重要なことだと改めて思った。

(前山特任館長)

どの企画展をやるか、判断基準のときにやはり収蔵品と関係があるというところを比較的重く見ている。マン・レイの展覧会するときでも市美術館のコレクションにシュルレアリスムの作品が多いので、そういう背景前提のもとにマン・レイの展覧会をやるんですということで予算的にはちょっと厳しい展覧会だったが、そういう理由があるので、頑張らせてくださいということで、お願いして、やれたということもある。所蔵品にあるかどうかということは最初に考える。

(塚田委員)

どれも興味深く聞かせていただいた。牛腸の作品が活用されて全国巡回されている写真展を松沢館長からご案内していただいて千葉市美術館で観たが、本当に素晴らしい展覧会で、コレクションとしてそういうものを持っていて、それが全国にというのは本当に理想的な形だと思う。とりわけコロナ以降、顕著だと思うが、遠方からものを借りたりということがなかなかできにくくなってくると、コレクションが勝負になってくるというのが公立美術館の課題として現実的になってきていると思う。そんな中で市美術館は着実に素晴らしいコレクションを形成されているし、活用されているし、息の長い活動ができるというのがよく見える展覧会であったというのを感じていた。

今回、2年前に面白そうだなと思っていた2つの企画が報告されたが、それについて伺いたい。来館者数でいえば、少ないということになってしまうが、「新潟映像祭」と新津美術館では「ここらへんの生活（美術と考古でみるここらへんの生活展）」。この2つに興味を持っており、このようなトライアルな企画、あるいは、地域連携で何かできないかという企画というのはものすごく人が入るものではないけれど、これも美術館の基礎体力みた

いなものに関わる企画だろうと思っていた。映像祭にしても施設の連携にしても、美術館として今後も何かやれそうだという感触をお持ちになられたのか、もうちょっと時間がかかると思ったのか、そのあたり何かあればお聞かせいただきたい。

(前山特任館長)

映像祭については、2年前も話したと思うが隙間企画である。企画展と企画展の間が空いて館を閉めるのが好きではないので開きたい、開きたいが予算がかけられないというときに、映像だったら看視がいなくてもいいのではないかというような話を担当とした。あとは美術館で収蔵している映像作品もあるし、すぐそばにアーティスト・イン・レジデンス事業をやっている「ゆいぽーと」という施設があり、そこで滞在制作された映像もあるので、そういうものを使いながら、あまりお金をかけずにやれるのではないかということで、映像は柔軟性があり、たくさん作品を揃えなくても空間が埋まるというものもある。やり方によってはこれからもあるのではないかと思う。

(松沢館長)

新津美術館ではちょうど1年近く前、「美術と考古でみるここら辺の生活。」という展覧会をやらせていただき、予算の都合で印刷製本した図録は作れなかったので、担当者と相談してPDF版のWEBでダウンロードしてご覧いただけるWEBカタログを作ろうということになった。お手元に出力したものをお配りしているのでご覧いただきたい。初めての試みであったが、担当者が苦勞しつつもアイデアを盛り込んで頑張ってくれた。なぜこの展覧会をやることになったかという、2年前の協議会するときも種明かししたが、新潟市文化財センターを所管している市歴史文化課の課長補佐が私と高校の同期生で言葉を交わす機会も多く、ジャンル横断で何か一緒にやりましょう、というところから始まった。新津美術館は、花と遺跡のふるさと公園という広大なエリアの中に立地していて、とりわけ美術館の背後の丘の上には国指定の史跡、古津八幡山遺跡がある。同じ所に立地している縁もあるので、一緒に何かできたらいいなというのは、歴史文化課の方とは話をはじめた当初から一致していた。それで全面的に歴史文化課の応援、協力もあって文化財センターと良い連携ができた。おかげさまで、美術の分野ではわからないが、考古の分野ではけっこう評判になっていたとあとで聞いていた。実はこの同じ公園の中には県の埋蔵文化財センターもあるのだが、次の機会には、ぜひうちともコラボしてほしい、とリクエストをいただいた。また、長岡にある県立歴史博物館の学芸の方も「観たよ」と感想をくれたが、考古の分野の方々の間でずいぶん評判になっていた。新津美術館のこのエリア、お膝元とかローカルな資源に着目し注力した展覧会であった。私が4年前に着任したときに「原点回帰」ということを、何となくの目標とした。あまり欲張って手を広げるのではなくて、新津美術館の周辺の地域資源にしっかり目を向ける。ここに新津美術館があるからこそ出来ること、どういう施設ミッションがあるのかということをも具体的に展覧会をやり

ながら、手探りで探していくということをしてきたらいいなど。お手元にある資料は1月20日から始まる「笹岡了一と新潟光風会の作家たち」展のチラシだが、ある意味では同じテーマのもとで開催する展覧会だ。こういった流れで「ここらへんの生活～」を担当してくれた学芸員が、独自の構想で新津地区の様々な資源をコンバインドさせた企画展を水面下で準備中である。私も応援しつつ折々に相談にのっている。今の時点ではまだ具体的にお話しできる段階ではないが、そのような動きが始まっていることもお伝えしたい。

(塚田委員)

画期的にいいことだと思う。私のいる世田谷美術館も世田谷エリアのローカルなものにきちんと戻っていこうという動きが大きく、そこで意外にヒットしているものがある。世田谷区内には電車の路線が何本もあり、沿線に住んでいる美術の作家や文学の作家をただただ拾い上げて展示するという地味な「沿線物語」というシリーズをやっている。意外とお客様が喜んでいる。地元の人も喜ぶし、よそから移って来てよくわからないが自分の住んでいる近くにこんな作家さんがいたんだみたいに、新しく住み始めた地域に親しみを感じられるからすごくいいというコメントをくれることもある。この企画も何かつながっていくようなことがあるようなことを聞いてとてもうれしく思う。映像に関してもやりようでいろんなことができるし、あとは市美術館は休館に入ることなので、たとえば休館中に何かやれ、という話が当然行政から出ると思うが、そういうとき映像というのは可能性があるのかなと思いつつ伺っていた。

(佐藤副会長)

私も新潟映像祭を観たかったが、20日間の開催であつという間に終わっていて、854名しか観ていないのはもったいないと思う。休館中や大規模改修中の時等に工夫していただけたらと思う。あとでまとめてご意見いただく場面があるので次に進めさせていただく。

(2) 新潟市美術館・新津美術館 令和6年度事業計画

資料2、4、5 パワーポイントの画像に沿って、新潟市美術館の令和6年度の事業計画について事務局より説明。続いて、資料3、パワーポイントの画像に沿って、新津美術館の令和6年度の事業計画について事務局より説明。

(白須委員)

改修工事の件だが、市美術館のショップとカフェがとても好きで、カフェは人気があるが、改修中はどちらとも閉鎖となるのか。改修後はまた同じものが入るのか。

(川瀬館長)

ショップとカフェだが、実際には今年の10月から休館になる。契約が9月までになっており、いったん切れるが、改修工事が終わったら、お披露目と同時にショップとカフェも開くので、新たにまた募集、契約という形になる。ショップとカフェには話も既にしてあり、一旦お休みになる。

(白須委員)

同じカフェがまた入るとは限らないのか。

(川瀬館長)

契約上は決まっていけないということになる。

(佐藤副会長)

ショップはヒッコリーさんだと思うが、古町では買い求めることはできるが、市美術館でも人気のあるショップなのでよろしくお願ひしたい。

(馬場委員)

市美術館と新津美術館と個人的にこれからの企画展を楽しみにしている。大学もそうだが、美術館として先ほど話があった地域とどうつながっていくかということが国立も公立も一番重要なところで、そこが一番高く要求されていて、それは当然地域に根付くという結果なのだが、美術館も同じだなあと常々思っていて、教育機関と美術館がどうやって連携していくのかというところは結構大事なところだと思っている。特に近年は子どもが少なくなってきた。その割にどうやってお子さんを育てようかという父兄の皆さんの意識が昔より高くなってきた。私事なのだが、長岡と新潟では全然地域差があり、距離もあり、文化圏も違うのだが、たとえば大学が子どもさんに対応するためのものづくりのための機会を作った場合にもものすごく反響があった。これは一時期県立近代美術館と連携して場所を移してやるということもやったりして好評だったのだが、諸処の事情でコロナもあって一旦休憩して、収束したのだがかなり小さい形で再開して、前から思っていたが、新潟市はマーケットが大きいとか人口も多いし、アクセス交通の便もいいし、そういう意味では集まってくる機会というのは多いのかな、大学も非常に多いというのもあって、教育機関と美術館との関係性というものは今後ますます必要になっていくのかなと私は思っている。そういうところの視点っていうのが実はどのようにお考えなのか、今回休館されるとそういうワークショップもなくなり、そういうときにどんな手立てを考えるかをお聞きした。

(川瀬館長)

答えになるかわからないが、市役所の人間である私が美術館に来たときに言われたの

は、展覧会というのが目立つがそれは美術館、学芸の業務のひとつであって、その前に作品の収集であったり、調査研究であったり、保存・修理であったり、そして教育普及というのも大事な柱のひとつだということである。そのなかで先ほど話があったアートリップがあったり、新津の出前美術館があるので、とにかく教育、未来の芸術家であったり、鑑賞していただく方であったりという方々を育てることが大事だと思っている。そういう意味で連携というのが大事だと考えている。具体的に今やっているのは主に小中学校の関係になる。

(前山特任館長)

私が前にいた美術館は教育局だった。ここは市長部局になる。教育局にいるとよかったと思うのは、学校と距離が近いこと。だから先生たちに来てもらうときも教育センターみたいなところから流せば、すぐ反応が返ってくる。これは思い出話になるが、昔は美術館と学校はまったく関係がなかった。お互い相手のことを考えたことがない。美術館なんて子どもが来るもんじゃないって学芸員が平気で言っていたし、学校の先生たちは美術館に連れて行くというのができない。そこで、まず団体で行きたいと言っても校長の許可を取るまでに一年かかるという時代だった。その後、それじゃだめだということで、学習指導要領の改定もあり、美術館をちゃんと使いましょうということで、私は「ようやくお互いがリングの上に初めてあがった」という言い方をしたが、そこで話を始めて、お互いに協力し合おうということで、学校との連携が始まった。その中で大学との連携というのは、単位が取れるという制度、確か日本で初めてといわれたのだが、美術館の教育普及事業に学生が来て毎週土曜日に子どものためのプログラムをやっていた。そこに来ることで単位が取れるっていうことを学校と協定書を結んでやっており、人手が足りない部分は学生に手伝ってもらう、向こうは子どもと会う機会が少ないので、教育学部としても実地の訓練になるということで、お互いにメリットがあった。頑張ればそういうことができるのだが、手がかかり単純に簡単な話ではないが必要だと思う。

(馬場委員)

私は大学側の人間なので、今「単位」という言葉が出たが、昔は時間さえあれば美術館に行くという行動パターンだった。今の学生は隣に美術館があっても行かないので、これはなぜかという、さっきおっしゃったように、今までの形をそのままやっても無理で、うちも「単位化」するためにどうするかということでボランティアを単位化した。それから地域貢献という授業も単位化した。これは難しく、どのくらいの分量をどのくらいの重さ、量をどれだけ働いて、もしくは関わって、時間を過ごすか、1単位たとえば90分という単位数があって、これを演習だったら「×2」だとか、文科省が決めたものがある。そういうものをいろいろクリアして作った。そうしたら教員がやりたい研究、やっている研究を手伝うことによってそれは単位化できるというふうにした。それは今のうちのやり

方なのだが、学校が今そうやってどんどん変わってきている。特に国立大学も公立大学も新潟大学も地方の国立大学はシフトを変えて、地域に貢献する国立大学というように変わってきている。だから今問題になっているのは公立大学と国立大学の地方の2つがどうやってそれを分捕るか、極端にいうとそういうふうになっている。いろいろあるのだが、前山特任館長もおっしゃっていたが、突破していかないと新しい形は作れないので、ぜひお願いしたい。

(前山館長)

もうひとつ余談だが、私が前に勤務していた美術館の最寄駅には某国立大学があったが、その学生は全く来ない。

(馬場委員)

しかけていくのは実は教員であり、事務局員であり、美術館側の方であり、東京では都美術館では芸大と五美大展という卒展をやる。そのときは当然パラレルにいろいろ展覧会を一気にやるが40年前からやっている。今もやってると思うが、これはお金をとっていない。だけどそれによって集まってくる。一昨年コロナでうちの大学が卒展をできない状況があった。では外で出そうか、入試が近いときにそういう状況はまずいというのがあって入試が出来なくなるので、そうではないところでやればいいのかと、非常に甘い論理だが、県立近代美術館にお願いしに行った。例えばそういうことができないかと言ったら難しいと。大学、高校、教育現場と美術館がどうやってつながっていくかということ、現場にいる人たちがやっていかないとなかなか難しい。私自身もグループ展かなんかで県立近代美術館を使わせていただいたこともあって、もっと活性化するような仕掛が今日の議題とは違うのだが、ぜひお考えいただけるとありがたい。

(川瀬館長)

関連して、今年度行った富井大裕展で長岡造形大学と新潟大学の学生からボランティアで来ていただいたので、担当の荒井係長の方から話をさせていただく。

(荒井学芸係長)

まさに馬場先生の学生さんを活用させていただき、一応事例の紹介ということで今ほど川瀬館長からの話にあった今年度の富井大裕展で、作品の設営に長岡造形大の学生5名、それから新潟大学の田中先生にもご協力いただき2名の学生さんから手伝っていただいたことがあった。東京や埼玉のように継続的、定期的に受け入れるということがまだ確立できていないが、今年もそういったことができたし、ちょっとコロナでできなかったものの、2020年の長沢明展でもやはり学生さんの展示設営ボランティアを募集していた。さらにその前のパウハウス展でも、新潟青陵大学の学生さんから、ほとんど会期中毎日入

っていただくような形で入れ替わり立ち替わり来ていただくという大学生のボランティア事業に取り組んでいる。ただ学生がなかなか足を運ばないということが事実としてあり、今年度試みたところとしては、富井展で学生さんがWEBのアンケートに参加していただくと無料というのを実験的にやってみて、それでも来ないならということで、今回の「少女たち展」では学生さんワンコイン500円というような、全部無料はできなかったが、あの手この手で学生さんに来ていただけるようにということをやっている。数は少ないが、やっぱりボランティアに入ってくれている子たちは卒業しても関わった学芸員とも顔見知りにもなるし、美術館に親しみを感じてもらえるので、きっかけづくりにもじわじわとなっていければなと願っている。以上事例の報告である。

(三保委員)

今の学生さんが美術館に来ないっていうのは、もっと根が深いのではないかと考えている。美術業界の方がどういうふうにいるかわからないが、美術館ってしーんと静かに観るものなのではないでしょうか。ロシアの美術館にたまたま行ったとき、こんなにうるさくてもいいんだと思って目が覚めたような感じがした。試しにディック・ブルーナの展覧会に孫を連れてきて、4歳と2歳の孫で、ブルーナだからいいなと思って来たのに、ちょっとキヤーって言うと、その父親があわてて口をふさいで外に出でて行った。そういうことになると、その親も美術館って子どもがうるさくしてちゃだめなんだと思っているから子どもはそうやって育つ。身近な美術館って、やっぱり小さいころから美術館を身近なものにしていかなければ、大学生になっていい加減育っている人たちだけ教育してもだめじゃないかなと思っている。それと保育、託児のサービスがあるが、厳しい言い方だが子育てをしている人はそのサービスのないときは来るなということにつながる。だから、頭の固い大人たちに「美術館ってもっとみんなわいわい気持ちをもっと軽くしていいんだよ」とか「おかあさん、この絵いいねって言ってもいいんだよ」と言ってもすぐ「しっ」となるのではなくて、そのような雰囲気づくりをしていかないと、ますます子どもは「美術館は怖いところだ」となり、成長しても近寄らない、私みたいなおばあさんになってからあの美術展行こうかなと思ってしまうので、もっと底上げをしていかなければと思うが、美術業界の方々はどうのように考えているのか。

(前山特任館長)

ものすごく混んだ展覧会は無理かもしれない。空いている美術館はおしゃべりして自由にしたほうがいい。

(三保委員)

空いている美術館ほど足音などそういうのが気になる。

(前山特任館長)

どこの美術館か覚えていないが、普通の美術館はしてはいけないことが書いてあるが、
していいことを表示している。その中に話をするこつていうのもあって、そんなのもい
いなって思う。考え方だと思う。規制する方向ではなくて、活性化させるような方向で、
考えるのがいいのではないかと思っている。

(三保委員)

それには年上のおじいさん、おばあさんたちを洗脳する必要があると思う。新潟の美術
館はしゃべってもいいんだと。評価してもいいし、お母さんが子どもたちに言ってもいい
んだつていうほうに書いていただくとか、全国にもないような取り組みをしていただい
て、それが子どもたちが成長して、どれだけ美術館にくつついていったかというちょっと
長い目でやれば子育て中にワンオペで苦しんでいる親たちはどんなにうれしいかわからな
いと思う。

(佐藤副会長)

ユナイテッドシネマで、子どもを抱っこして多少の声はよいという上映時間がある。美
術館はやはり静かに鑑賞したいという一般の方がいるならば、限定かけてこの時間帯はい
いとか。その時だけはお子さんが多少声を出してもよいというお互い様精神でいくとその
ような展覧会もいいのではないかと思う。様々な芸術祭や、田中達也さんのときもそうだ
ったが、けっこう皆さんは鑑賞して感じたことを楽しんでしゃべっている。場の雰囲気だ
と思うが、一方でマナーも大切だと思う。

(松沢館長)

今のお話に関連して、新津美術館術館では長らく続けているサービス「こどもタイム」
というのを設けている。会場で軽く BGM を流していて、その間は展示室の中で子どもと保
護者の方が自由にお話ししても大丈夫というもの。お手元の「笹岡了一と新潟光風会の作
家たち」のチラシ裏にも案内を入れているが、会期中の第一、第三の木曜、日曜午前 10
時から午後 1 時までということで日時限定ではあるが、こういう形で地道な活動を新津美
術館は取り組みとしてやっている。ただコロナ禍の 3 年間は積極的にこういうお話 OK と
いうことが言いにくかったために、お客さんがたくさん入る日曜はやめましょうというの
が続いていたのだが、新型コロナ感染症の 5 類への移行後、ようやく正常に戻ってきてこ
のサービスも継続中ということでご紹介させていただく。

(三保委員)

革命が起きるのではないのでしょうか。もうひとつ、改修されるということだが、この建
物は前川さんが建てられた素晴らしい建物だが、たとえば視覚障がい者もそうだが、聴覚

障がい者に対しても緊急時の配慮というのは何か改装のときに考えているのか。

(高橋副館長)

今回の改修については、一昨年に老朽度調査を行い、要は機能的に古くなったもの、あるいは物理的に古くなったものを変えていこうというものの改修になる。本当にいろんなことをやる。さきほどお話しにあった熱源だとか、空調の関係だとか、サッシを塗装するだとか、外の打ち込みタイルを取り換えるだとか、エレベータもある。そういうことを主としてやる工事で、今ほど言われた視覚・聴覚障がい者への対応というか、そこまでは現実想定はしていなかった。ただし改修をするうえで、何か変わったように見せたいなという思いもあるが、現実問題改修の主たるものは古くなったものを変えていくということなので、どこまでできるかという部分はある。

(前山特任館長)

私は比較的障がいのある人と関わりがあるので、一般的にいうアクセシビリティというが、アクセシビリティの問題というのは、どの施設も今は民間も義務になろうとしているくらいなので全国的に待たなしである。これはハードの問題ではないと思っている。まずソフトの問題なので、職員全員、職員というのは受付の人から看視の人全部だが、そういう人向けの講習をやりたいが、なかなかそこまではしていない。たとえば障がいのある人と介護者がいたときに介護者に向かって話をしてしまうことが当事者にとって阻害された感じを与えてしまう。だから何か話すときは当事者に向かって話しましょうということをいろんな委員会で言ったりするが、そういうレベルの話から必要なので、これは館の職員が意識してできるように、もっといろいろあるが、そのようなレベルに上げていかなくてはいけない。正直言うと新潟はちょっと遅れている。他はいろんなところで文化施設向けのマニュアルが出来ている。そういう県もある。でも新潟はそういう動きが見られない。新潟県も市もなのだが、ここは何かしなければいけないことだと思う。

(三保委員)

改修がいいチャンス。元旦の地震も考え方を変わると機会じゃないかと思うし、この建物自体たぶん設計を変えることは難しいとは思いますが、そのことについてはできるのではないかという気がするし、一番いいのは障がい者自身が緊急事態を認識して自分の行動を判断するっていうことだと思う。だからその先職員がどう誘導していくかは職員さんの問題だが、たとえば地震だったら地震です、地震ですっていくらピーポー言ったって障がい者はわからないから、電光掲示板で地震と出るとか、目の不自由な人には今、音がするので、そういうものを考えてみたらいかかが。

(佐藤副会長)

せっかくの改修工事ということでご意見をいただいた。他に市美術館、新津美術館の運営を含めてご意見いただけたらと思う。

(鈴木委員)

富井大裕展の彫刻展を拝見させていただいたが、すごく斬新なレディメイドを使った素敵な彫刻だった。トークショーも参加したし、そのときに隣でコレクション展があった。そこに彫刻の首がいっぱい並んでいて、みんな壁の方に向かって、後ろ頭しか見えない、そちらに光を当てていた。美術館の人に聞いたら、富井さんが全部展示をしたという話を聞いた。なかなかやるなと思っていたが、私はどうしても顔の方が見たくて心残りだった。そういう目的を持った並べ方もすごくいいと思うが、最初にあれを見た人はどう思うんだろうと思って、他に感想があったらお聞きしたい。

(荒井学芸係長)

ご質問の趣旨は富井展でのコレクション展についてでよろしいか。私が富井展の担当をさせていただいたが、富井さんの展覧会開催中は、それを観に来た人はなんとなく富井さんのことを知っていたり、それを踏まえて観ることができるであろうと思っていたが、富井さんの展覧会が終了してもコレクション展が続いており、これがちゃんと伝わるかなと実は私も担当として不安に思っていた。もしかしたらお叱りの声を聞くかもしれないと思っていたが、意外にもそれがなくて、みんな面白がってくれたというのが非常にうれしかった。人数も少なかったというのかもしれないが、冒頭に富井さんによるこういう趣旨で展覧会をしたというような挨拶がわりの文章があり、それから作品リストと一緒に展示の図解というか、こんなふうに観てほしいといった謎解きのような、答え合わせのような富井さんの解説があったことで、それをよくわかんないなあと思って観たけれども、それと合わせて観たらもやもやとしながらというか、そのなぞ解きを楽しめるモードで皆さん観てくださったということが伝わってきて、結果的には非常にいい彫刻入門になっていたというのが改めて担当としても感じいったところだった。

(山浦委員)

率直に言って面白かった。それから2つめには学芸員さんと顔を見合わせて、こういう展示できないよねっていうふうにおっしゃっていて、そうだよって私もうなずいたような記憶がある。それから3つめは、いい彫刻のコレクションをお持ちだと思った。一応、私も彫刻史を勝手に自分の専門だと思っていて、本当に日本の近代彫刻を彩るような作家たちの作品を、そんなに大きなものはないけれど、よく集めたなあと思って、ああゆうものは常時観れるくらいの、例えば横手市にある秋田県立近代美術館に行った時も廊下に彫刻が展示してあったりして比較的環境に影響されないものだと思うので、常時展示してもらえればいいなあという感じがした。それを思いながら、特に新潟市美術館のコレクショ

ンは、絵画にもいいものがいっぱいあって、なかなか点数が多いせいか、観る機会がないような気がする。去年だったか、そういうのを集めた展覧会があったが、ぜひまた機会を見つけて所蔵品を見る機会を作っていただけたらと思う。例えばピカソなんかも、一年に一回、今日はピカソの日ではないが、ピカソウィークでも何でもいいので展示していただけると、「お、ピカソ出るってさ、じゃあ、見に行こうぜ」って言って、もともと高価だし、日本でもおそらく指折りのピカソだと思うが、ありがたみが益々増すような感じもしたし、かえって行かない人も「じゃあ行こうぜ」みたいな感じになるんじゃないかなと、そんなことを思っている。まあ5千点、日本でも有数の公立美術館ではないかなと思う。学芸員の知力と情熱で美術館は変わると思っているので、ぜひ頑張ってください。

(佐藤副会長)

令和7年度の展覧会でご検討いただきたい。白須委員は先ほどの意見についてはよろしいか。

(白須委員)

もやもやが解けてよかった。学芸員さんに質問する勇気もなかったが、今、もやもやが晴れて、観れてよかったと思っている。

(捧委員)

来年の企画を聞いていて、全部観たいと思える展覧会で、普段ホキ美術館とかずっと行きたいと思っていたがなかなか遠くて行けなかったり、遠藤彰子先生の作品も武蔵野美術大学美術館で観たが素晴らしく、本当に新潟で観れることにわくわくしている。本当に全部いい企画だと思っている。私も去年の展覧会は両館とも半分くらい観ているが、市美術館の企画は切り口が面白いと思っている。ブルーナ展では、お子さんたちが楽しめるブルーナなのかと思っていたら、意外と違って、子どもが見れるように目線は低く設定されているが、意外と大人っぽい、大人もすごく楽しめた。「ブルーナと一緒に美術を鑑賞」というアイデアがよかったと思っていた。前衛写真展も、写真にも「前衛」という概念があるんだなっていう感じで写真自体はちょっと難しいような、ちょっと私には難しい写真もあったが、写真の概念がちょっと変わった。市美術館らしい展覧会だったと思っていた。新津美術館のブラチスラバ世界絵本原画展は、絵本の世界にも公募展というか、こういう展覧会があるんだなという、恥ずかしいが全然知らなかった。韓国と日本に絞った経緯はどうしてなんだろうなと思ったり、世界の絵本展だったのでアメリカとかヨーロッパとかいろんな地域のものがあるのかなと思っていた。平山郁夫展も佐川美術館から借りてこられたものであったが、佐渡の地元を関連づけた企画があって、やはり地元ってこういうことをやるのは大切だなって思いすごく参考になった。うちもやろうというい

ろアイデアをもらえた展覧会で面白かった。今日皆さんがいろいろおっしゃっていて参考になったのが、地元とローカルというものです。新潟は地元のことをやると受けるけれども、中央やもっと広い世界の作品を欲している人も多いので、それは東京とはちょっと違うなと思うが。去年やった写真展でローカルなもの、例えば三条市の下田というところの写真がでたりすると、それを観たくてすごくたくさん地元の方が来られた。うちはマイセンのコレクションをしているが、マイセンの展示にすごくお客さんが来られた。30周年ということでうちも気張って、本当にいい作品をいっぱい出して、今までのマイセン展以上にもすごく女性客がいらした。テレビの広告やネットでも発信していたので、口伝えとかネットでもお客さんがいっぱい来られるなあと去年すごく感じた。30周年ということでテレビ広告、新聞広告いろんな広告の相乗効果で、来館者が今まで以上に雪梁舎にも来ていただいた。宮田亮平先生の佐渡の展覧会をやったが、地元の先生なので佐渡からいっぱい来ていただいた。先生のネームバリューもあって、宮田先生の作品を観たい方々が、一日で狭い雪梁舎に300人以上の方がいらした。そういった意味で地元と中央とか世界の美術をバランスよくやっていくのも大事だなと去年は感じた一年だった。宮田展のときにうちはほとんどワークショップをやらないが、新潟市内の小学校に募集して金属でたん金のワークショップをやったが、すごく好評で、一瞬というのも大げさだが本当に全部の会が埋まってしまった。すごい反響があったので、公のところにはどんどんやってほしいとすごく思っている。市立、公の美術館は若い人とか子どもたちのためにそういった普及活動を積極的に行っていただきたいと思っていた。あと災害マニュアルについては、もしこうなったらこうしようというのを改めて館の職員に徹底しないとイケないと思っ
ている。マニュアルまでは作れないかもしれないが、最低限のことは徹底していかないとまずいというのを皆さんの話を聞いていて参考になったので、障がい者についての話も今日は聞くことができ本当によかったと思っている。

(高橋副館長)

ご審議誠にありがとうございました。次第にはないが、本協議会の公募委員の皆様の任期が本年3月で満了となるので公募委員のお二人の方から一言づつご挨拶いただけたらと思う。

(白須委員)

本当に貴重な機会をいただいて、ありがとうございました。そんなに興味のない企画展も全部一通り行ったが、引き続き両美術館ともこれからたくさんの方が訪れるようないい美術館であってほしいなと思った2年間だった。これからも足を運び続けたいと思う。今日はありがとうございました。

(山浦委員)

このたびは2年間ということで公募委員やらせていただきありがとうございました。別の角度から新潟市美術館、新津美術館を見ることができて私も大変勉強になった。またいろいろ大変なこともあることも分かっており、我々文句ばかり言うのは得意なのだが、中にいる職員の頑張りというのも見ることができて、そういう意味では本当にありがたい機会だったと思っている。新潟市は2つも美術館を持っていて、これはたまたまなんでしょうが、よその学芸員さんからすると、「すごいね、羨ましいね」と言われる。「そうですね」と言って帰ってきたが、そういう美術に触れられる機会が多くなっている喜びを受け止めながら私自身もこの両館に通いたいと思う。本当にどうもありがとうございました。

4. 閉会挨拶

(松沢館長)

貴重なご意見やご感想をありがとうございました。いろんなお声を聞かせていただきながらあっという間に過ぎた充実の時間だった気がする。さきほど捧さんから雪梁舎美術館が30周年を迎えたというお話があったが、ちょうど雪梁舎美術館が開館したころに私も新潟市に入庁して、30年経ったんだと改めて感慨深く思った次第である。通算では新潟市美術館に24年、新津美術館に6年、合計で30年。この席上では私が一番長く新潟市の美術館に関わってきたが、この協議会にも長くいる分、視点がすっかり定点観測的になっている。記憶を遡ってみると、協議会の代々の委員の最初の頃に長岡出身の我々美術館業界では重鎮中の重鎮、本間正義先生という方がいらっしゃって、前山特任館長の古巣である埼玉県立近代美術館の初代館長でもあったお方だが、重厚な存在感を発揮されて、草創期の新潟市美術館が一人歩き始めるために力強く手を添えてくださった方だった。それから思い出深いのが東京芸大の学長をお勤めだった宮田亮平先生。非常に細やかなお気遣いの技をお持ちの方でいらっしゃって…そうした方々の、この場に居られたいろんな委員のお言葉だったり、お顔だったり、今日お話しを伺いながら、私の記憶の中に蘇ってきていた。今、美術館、博物館含めてミュージアムが持続可能かどうかということが、私たちの生活そのもの、世界そのものが持続可能かどうかということとともに大きな課題になってきている。まさに今日のお話というのは、美術館をいかに持続可能なものにしていくかという上で、貴重なご意見を聞かせていただいた場であったと考える。これからも両方の美術館、職員が力を合わせ、知恵を出し合って、持続可能な、そしてより多くの市民から愛される美術館であるために頑張っていきたい。本日はありがとうございました。